

[月刊]キリスト教書評誌

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2017年7月1日発行（毎月一回発行）第714号

ISSN 0286-7001

本の ひろば

出会い・本・人

「光の国」から僕らのために 澤村雅史

本・批評と紹介

鈴木範久 著

聖書を読んだ30人 月本昭男

「時の徴」同人 編

日本基督教団戦争責任告白から50年
石田 学

三野和恵 著

文脈化するキリスト教の軌跡
高井ヘラー由紀

三上 章 著

ケンブリッジ・プラトニストの哲学的靈性
山本 巍

清水光雄 著

ウェスレー思想と近代 東方敬信

梶原直美 著

オリゲネスの祈禱論 久松英二

J.フェネル 著／宮野 裕 訳

ロシア中世教会史 竹内謙太郎

袴田康裕 著

改革教会の伝道と教会形成
関川泰寛

姜尚中・上山修平 著／日本クリスチャン・アカデミー 編
原子力発電と日本社会の岐路

小中陽太郎

小原克博・勝又悦子 編

宗教と対話 芦名定道

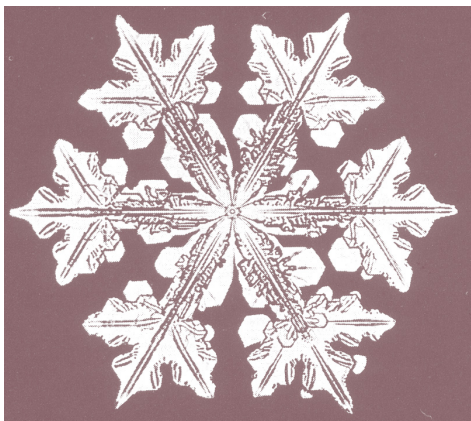
エッセイ

マルティンがマルティンから学んだこと
深井智朗

本屋さんが選んだお勧めの本

近刊情報

書店案内



7 JULY
2017

ポップカルチャーを哲学する



高橋優子 (酪農学園大学准教授) **福音の文脈化に向けて**

現代日本を代表するポップカルチャーにはキリスト教的な象徴が溢れている！ それはなぜ？『新世紀エヴァンゲリオン』や『千と千尋の神隠し』から『永遠の0』や村上春樹の『1Q84』にいたる24作品を徹底批評！ そこに流れるキリスト教的なメッセージ=現代の日本人に最も近い福音の現在形を浮かび上がらせた問題作。

6月26日 ◆四六判・本体2000円

キリスト者の標識

井上良雄著

6月26日

キリスト教講話集Ⅲ

◆新書判・本体1700円



東京神学大学で教鞭を執りつつバルト「和解論」全巻の翻訳に打ち込み、日本基督教団の社会委員長を歴任するなど、信徒として教会に仕えた井上。没後、書齋で発見された14冊の説教ノートから復元された説教・講演を全4巻に集成。第三巻には40年代から60年代までの12編を収録。戦後の激動期を至純な信仰をもつて生きた「証人としてのキリスト者」の真実な言葉。

近刊 待ちつつ急ぎつつ

キリスト教講話集Ⅳ

〔7月下旬予定〕

既刊 大いなる招待

キリスト教講話集Ⅰ

◆本体1700円

既刊 エデンからゴルゴタまで

キリスト教講話集Ⅱ

◆本体1700円

日本で神学する

栗林輝夫セレクションⅠ

栗林輝夫著／大宮有博・西原廉太「編」

栗林輝夫の遺稿選集全2巻、いよいよ刊行開始。第1巻は、日本の文脈に現場に根ざして神学を営んだ著者の論考を精選。解放神学者としての田中正造論、賀川豊彦論から、ポスト・フクシマの神学まで。実践に固執した栗林神学がここにある。

◆A5判・本体3600円

ゴッホと「聖なるもの」

正田倫顕著

見る者の魂を震わせるゴッホの作品。書簡と作品の徹底的な分析を通して、ゴッホとキリスト教の関係、また彼の宗教性の内実を作品がはらむ「聖なるもの」の秘密を明らかにした俊英の力作。



◆A5判・本体2700円



出会い・本・人

「光の国」から僕らのために——澤村雅史

本に呼び止められる、という経験を、多くの人が語っています。私にとって、切通理作著『怪獣使いと少年』（宝島社／洋泉社）との出会いがそうでした。九州の教会に最初の任地を得た年、書店の棚に並ぶ背表紙の中から、なぜかこの本が気になり手に取ってみたのです。以来、「ウルトラマン」シリーズの脚本家たちに焦点をあてた本書の作家論に引き込まれ、聖書以外では（と仕事柄、申し上げておかねばなりません）、最も繰り返し読んで読んだ本となりました。脚本家たちへのインタビューを軸に、様々な映画、ドラマ、文学作品への縦横無尽な言及を駆使しつつ、彼らの作家性へと肉薄していく真剣な文芸批評を成立させている本書は、いい年をして子ども向け番組に心惹かれていた自分にとって、頼もしい味方のように思えたものです。それだけでなく、本書に展開されている作家論からは、なぜ自分がそのように心惹かれるのか、という答えをもらったように思います。怪獣や宇宙人が跋扈する物語の背景に、権力（国家や天皇制）や差別（沖縄、在日韓国・朝鮮人、アイヌ等への）に対する作家たちの鋭い問題意識と、「正義」への懐疑があることを知って、大きな驚きを覚えると同時に、それ以上に、何か得心がいったような思いもしたのです。

本書からは他に、ウルトラマンシリーズとキリスト教のいく

つかの接点も読み取ることができます。一例として、第4章で取り上げられている市川森一さんは、テレビ界でクリスチャンであることを公言して活躍した数少ない一人とのことですが、作品の中にもたびたびキリスト教的なモチーフやテーマを織り交ぜています。ちなみに晩年の市川さんが再び教会につながるようになったのは、雑誌『Ministry』（キリスト新聞社）誌上での切通さんとの対談を巡る経緯が大きく影響しているようです。

さて、切通さんは昨夏、ご自身の母で、長崎で被爆され、のちに苦学を経て教育者・バスケット研究者となられた狩野美智子さんとの対談『十五歳の被爆者——歴史を消さないために』（彩流社）を刊行されました。同書から、切通さんが、かつて広島牛田教会の牧師として、お連れ合いとともに平和運動に献身された藤田祐先生の甥（藤田先生のお連れ合い、晴子さんは狩野さんの妹）であることを知りました。そして広島牛田教会は、私の勤務先である広島女学院の被爆当時の院長、松本卓夫先生（市川森一さんと同じ鎮西学院ご出身）を中心に創立された教会です。

幼い頃受けた「光の国」からの問いかけ、そして、かの日の書店の棚からの呼び声が、今ここ、ヒロシマに召されて在ることへと不思議につながっている——そんな思いを抱いています。

（さわむら・まさし 広島女学院大学チャブレン・准教授）

近代日本の文化形成への聖書の寄与を具体的に示す

鈴木範久著

聖書を読んだ30人 夏目漱石から山本五十六まで



月本昭男

「孤島に本を一冊もつていってよいといわれたら、断然、聖書を選ぶよ。なかでも旧約聖書には人間のほとんどあらゆる面が描きだされているからね」。そう語ったのは、西洋哲学研究と大学教育に携わりながら、真言系の住職をも兼ねる、四〇年来の友人であった。それ以来、旧約聖書はユダヤ教の、旧・新約聖書はキリスト教の正典であるにとどまらず、人類の古典でもある、と評者は思うようになった。このたび刊行された本書を読み通し、その思いは確信へと変わった。

本書には、「人物と聖書」と題して、日本聖書協会の冊子『SOWER』一五号（一九九九年十一月）から四四号（本年三月）に掲載された著者の文章が集められている（「鈴木大拙の聖書」だけが例外的に別の雑誌から採られた）。冊子『SOWER』に手にされる方々の多くは、評者がそうであったように、毎号、著者の文章を楽しみしておられたはずである。そして、「あの人」は聖書をこのように読んでいたのか、「こんな人」も聖書を愛読していたのか、などといった感想をもらされたにちがいない。

〈こんな人〉のなかには、夏目漱石、石坂洋次郎、川端康成などの作家がおり、萩原朔太郎のような詩人がおり、西田幾多郎や鈴木大拙といった思想家が含まれる。かの山本五十六もまた聖書を、しかも英文聖書を、座右の書としていた。著者が選んだ「聖書を読んだ30人」のほぼ半数がこれら非キリスト教徒である。日本においては、キリスト教禁止令（高札）が撤廃されても、キリスト教が広く受容されることはなかったが、その一方で、聖書は教会の外でも読まれ、近代日本の文化形成に様々な面で寄与してきたのである。そのことを本書は具体的に教えてくれる。

著者・鈴木範久氏は、周知のように、綿密な内村鑑三研究をはじめとする数々の著書を公にされてきた、日本キリスト教史研究の第一人者である。評者は、さいわいにも、同じ大学で二〇年間ご一緒した。その間、氏の研究の一端を近くで垣間見させていただいた。歴史家にとって、百冊の研究書を読むよりも、現地実見から学ぶことのほうがはるかに大きい、とはトインビーの発言であったと思うが、氏の研究もまた現地に足を運び、

自分の目で原資料を探し出すことからはじまる。理論を操るのではなく、資料に事実を語らせる。

本書の場合も例外ではない。著者は漱石所有の英文聖書が東北大学に保管されていることを突き止め、それを閲覧し、書き込みや傍線箇所を丹念に調べ上げる。西田幾多郎の聖書は京都大学のほかに、石川県かほく市の西田幾多郎記念哲学館にも保存されており、著者はそこを訪ねて、西田がギリシア語新約聖書（ネストレ一二版）を手にしたことを確認する。「銭形平次」の作者である野村胡堂が長女を喪って深い悲しみにある妻ハナに贈った『旧新約聖書』を、著者は胡堂・あらえびす記念館で開いてみる。ほぼ全頁にギリシア語や英語の書き込みのある聖書を古書店で入手した著者は、後に、それが高名な英文学者・斎藤勇の聖書であったことを知る。その聖書のロマ書一章の末尾には「昭和二十年八月十六日朝之を読む」と記され、同19節の「ただ神の怒に任せまつれ」にあたる二通りの英文が

異なる二つの英訳聖書から書き写されていたという。

本書に収められた三〇の文章は、いずれも、図版も含め五ないし六ページに平易な文体で簡潔にまとめられている。だが、どの文章の背後にも、労を惜しむことなく足を運び、時間をかけた綿密な調査による確かな裏づけが横たわる。本書は「小事に忠実な」研究のみことな成果である。研究領域を異にする評者にとつても、著者はいままお研究者の鑑であり続ける。

（つきもと・あきお）立教大学名誉教授、上智大学神学部神学科特任教授
（B6判・一八四頁・本体一六〇〇円＋税・日本聖書協会）

日本聖書協会
God's Word — Life for the World

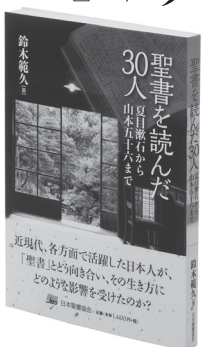
聖書を読んだ30人

夏目漱石から山本五十六まで

近代日本人は聖書のメッセージを
どう受け取ったのか？

鈴木範久〔著〕

日本キリスト教史の泰斗が深い共感をもって描く！



各方面で活躍した日本人がキリスト信徒であるなしに関わらず、聖書とどう向き合い、生き方などのような影響を受けたか。それを日本キリスト教史の第一人者で、内村鑑三研究者としても知られる鈴木範久氏（立教大学名誉教授）が探りました。

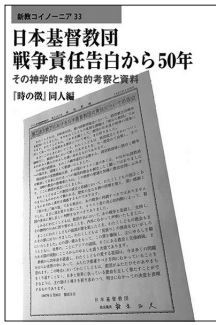
●B6判 ●並製 本体1,600円＋税



お問合せ ☎03(3567)1987 頒布部
<http://www.bible.or.jp/>

その意義を次世代に橋渡しする貴重な出版
「時の徴」同人編

日本基督教団戦争責任告白から50年 その神学的・教会的考察と資料



石田 学

日本ナザレン教団が「第二次大戦下における日本ナザレン教団の責任についての告白」を教団年会で採択し、公表したのは一九九三年三月のことであった。告白の内容に対する神学的評価はともかく、ナザレン教団として公式な戦責告白を表明したことは計り知れない意義を有している。日本ナザレン教団が戦責告白を持参して韓国と台湾を訪問したことによって始めて、両国のナザレン教会との公式な関係と交流が回復された。ナザレン教会の戦責告白が出された背景には、日本基督教団（以下教団）の戦責告白の存在があった。実際、教団の戦責告白なしには、ナザレン教会が戦責告白を表明することにはならなかったであろう。その事実は多かれ少なかれ、後のすべての戦責告白に共通することではなからうか。

わたしは日本基督教団に所属してはいないので、教団内部の事情にはあまり通じていない。戦責告白が持つ教会史的な意味と、世界の教会との交流における重要性自体は、たとえ教団内にいるいろいろな意見があるとしても、広く前提とされていると思う。それが必ずしも日本基督教団全体の共通

理解となっていないことを、日本基督教団の戦責告白から五十年にあたって出版された本書によって改めて教えられた。本書は三部構成を取っているが、わたしは冒頭の雨宮栄一氏の「まえがきに代えて」にまず心動かされた。氏が文末で語る「教会は荒野に生きるとき、純粹な信仰に生きる」は、全教会の将来に対する助言また警告と受け止めるべきであろう。この序文を読んで本書の内容に入ると、戦責告白後五十年を記念して出された本書の意味と価値がいつそう理解できらるであろう。

第一部には戦責告白についての三つの「論考」が、第二部には十三名の諸氏による「戦責告白とわたし」を主題とした体験的な論評が収録されている。第三部は「資料編」で、諸教派・団体の戦責告白が収録されている。

第一部で佐藤司郎氏は教団の戦責告白が持つ歴史の意味を提示し、それが果たして十分に受け止められてきたかを問う。戒能信生氏の論考は、教団の戦責告白成立までのいきさつとその後の歩みを要約・評価している。これら二つの論考

は、戦責告白が持つ意味と重要性を語るだけでなく、批判と反対にさらされ続けてきた現実にも焦点を当て、その背後にある論理と教団の体質を明らかにしている。山口陽一氏は日本福音同盟に加盟している三つの教派による戦責告白を通して、福音派の戦責告白が為されてきた経緯を紹介してくれる。戦責告白が教団のものだけではないこと、その成立事情が教派によって異なる事実の指摘は重要である。

第二部で十三名（内十一名は教団教師）が戦責告白に対する体験的な証言を語っていることは、第二次大戦を知らない世代はもちろん、戦責告白自体も生まれる以前の過去のものと思いがちな世代の人々にとって、戦責告白が今もこれからもどのような意味で関わりがあり、重要な意味を持っているかを証してくれることであろう。

第三部の資料編は、これまでに出された諸教派・団体の戦責告白を一覧することができる。戦後教会史の分野で日本の教派団体が戦争責任とどのように向き合ってきたかを考察す

る上で貴重な資料である。ただ、欠落しているものもあるの

で、今後何らかの形で補っていただけだと願う。

本書は日本基督教団の戦争責任告白から五十年という節目の年に、これまでの歴史的経緯だけでなく、将来に対する神学的・教会的意義を考察することの必要性を改めて思い起こさせてくれる貴重な資料であり提言の書である。戦責告白は日本基督教団が先駆者となったが、その後に諸教派・団体から次々に戦責告白が出されたことを考えると、戦責告白とその後の歩みは、戦後日本教会史全体にとって重要な主題の一つである。本書を編纂した『時の徴』同人には、諸教派・団体の戦責告白本文だけでなく、それぞれの解説も収録して日本教会史全体の視点から、戦責告白を評価・論評する続編を期待したい。

（いしだ・まなぶ）日本ナザレン教団小山教会牧師
（A5判・一六七頁・本体一三〇〇円＋税・新教出版社）

神学ダイジェスト122号

急速な変化を遂げる現代社会。その中において、多様な価値観に直面するキリスト者。本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現代人のかかえる信仰への真摯な問いに光をあてる。

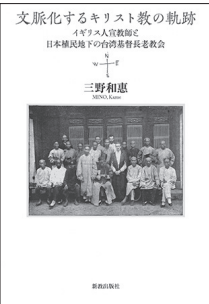
2017年6月発行
A5判120頁
定価630円（税込）

特集 『結婚・離婚・再婚』
巻頭言 『子どもたちの思いは…』
結婚と離婚についてのイエスの教え X・A・サンタマリア
結婚の不可消性の教え J・M・ゴルド
結婚・離婚・再婚をめぐる神学的諸相 J・I・G・ファウス
夫婦の一致における約束、合意、シンボル J・マシア
結婚の不可消性と再婚 E・シヨッケンホフ
福音と家庭 M・R・ダンジエロ
信仰なき最初の世代 A・マツテオ
福音派キリスト教についての考察 カナダ司教協議会
被造世界への義務（後編） ドイツ司教協議会

上智大学神学会
神学ダイジェスト編集委員会
東京都練馬区上石神井4-32-11
〒177-0044 Tel & Fax (03) 3594-4349
E-mail shing-dt@netjoy.ne.jp

「苦しみへの共感」としての文脈化神学形成論
三野和恵著

文脈化するキリスト教の軌跡 イギリス人宣教師と日本植民地下の 台湾基督長老教会



高井ヘラー由紀

普段あまり日の目を見ることのない台湾キリスト教史を研究する評者にとって、一般に認知度の低い台湾のキリスト教をいかに周囲に発信するかは日頃からの課題である。そんな中で、言い方は悪いが、台湾キリスト教の「売り」といえるのが、戦後台湾を代表する神学者黄彰輝 (Shaoh-Coe, 一九一四—八八) が提唱し、今日ではアジア発祥の神学思想として広く世界に知られるようになった「文脈化神学 (contextualising theology)」だ。しかし文脈化神学は、なぜ「ほかならぬ台湾」から出てきたのか？ この神学思想が台湾から生まれてくる歴史的必然性は果たしてあったのだろうか？ 本書読了後の今ならこのような言葉に置き換えることができる問いが、評者の中には長い間もやもやと言葉にならない疑問として存在していた。

本書はまさに、この問いと真正面から取り組んだ、秀逸な研究である。文脈化神学は黄彰輝個人だけに帰される神学思想ではない。否むしろ、台湾人が「人格的尊厳の喪失状態」に置かれていた日本統治期を通じて、台湾南部長老教会関係者によ

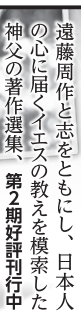
て形成された確かな神学的・思想的土壌が存在し、それが黄彰輝の神学思想として結実したのである。著者はこのことを、膨大な量の白話ローマ字台湾語、英語、漢文、日本語の諸資料と真摯に向き合い、一見エッセイ程度の記事のように思われる多くの素朴な文章を丹念に読み込み、そこから台湾人伝道者や信徒の福音理解・教会論・キリスト論・神学思想など（以下、神学思想と略）を浮かび上がらせることによって、検証している。植民地台湾の文脈において、いわゆる「神学者」ではなく一介の伝道者や信徒に徹していた、あるいは徹することを余儀なくされていた彼らが、実は台湾独自の神学思想の水脈を作り上げていたという現実が、本書の作業によって掘り起こされたといえる。この点において本書は、単なるキリスト教史研究にとどまらず、神学思想史研究、あるいは神学思想形成史研究というべき深みを持つ、極めて魅力的な書物となっている。

さて、本書は五章から構成されており、うち第一章、第三章、第五章はイギリス人宣教師キャンベル・N・ムーディ (Campbell N. Moody, 一八六五—一九四〇、在台期間一八九五—一九〇八、一九一五—二四) の神学思想と宣教実践に焦点が当てられている。台湾人伝道者や信徒との「共感的な関係」の中で形成され、「弱さ」や「悲惨さ」や「苦しみ」への深い共感に支えられていたムーディの神学思想は、文脈化神学にいたる主脈として理解される。一方、第二章および第四章では、ムーディとの直接的な接触を有していた林學恭 (一八五七—一九四三)、廖得 (一八八九—一九七五)、郭朝成 (一八八七—一九四七)、林燕臣 (一八五九—一九四四) から台湾人伝道者、そしてその信仰的系譜を受け継ぐ南部台湾の伝道者や信徒たちによって展開された神学思想が、それと織りなす教会自治運動などの伝道職務の実践と並行して検討されている。一九三〇年以降顕著になった教会自治の追求を、台湾「四百万同胞への使命」という林燕臣の理念との連続性においてとらえる議論は、教会自治運動の理解を立体的なものにすると同時に、一九七〇年代に台湾基督長老教会関係者をして権力に抑圧される

台湾人の「苦しみ」と共に歩む覚悟を決めさせた神学的確信が、戦前からの連続において理解されるべきものであることを明らかに示している。「災い」の下におかれた台湾人の「苦しみ」とどう向き合うのか。この問いこそ、台湾の神学思想に脈々と引継がれてきた中心的課題なのだろう。本書のような研究が出てきたことを心から歓迎するとともに、台湾のみならずアジアのキリスト教およびアジアの神学思想にひろく関心を持つ多くの方々に、ぜひ一読をお勧めしたい。

(たかい・へらーゆき＝明治学院大学非常勤講師)
(A5判・五二八頁・本体七〇〇円＋税・新教出版社)

遠藤周作と志をともし、日本人の心に届くイエスの教えを模索した神父の著作選集、第2期好評刊行中



第2期 全5巻

井上洋治著作選集

第3回 記本

8 法然 イエスの面影をしのぼせる人 風のなかの想い

悲愛を生きたイエスの生涯と重なる法然の生涯を描く「法然」と、井上神父のテレズ論、キリスト教の日本文化内開花のための礎石となる論考6本を『風のなかの想い』より収録。A5判・252頁・2700円

山根道公 編 解説
若松英輔 解説

クリンタン期洋楽伝来の実態を
西洋古楽研究の大家が平易に紹介

クリンタン音楽入門

洋楽渡来考への手引き
かくれクリンタンが
歌い継いだ「歌オラ
シ」をはじめ、幻
の「クリンタン音楽」
の姿を探り続けた
西洋古楽研究の大家
が書き下ろす、
待望の入門書。

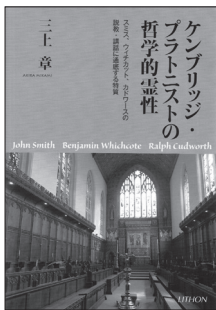


四六判・184頁・1,728円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp (価格8%税込)
<http://bp-uccj.jp>

ケンブリッジ・プラトニストの哲学的靈性

スミス、ウイチカット、カドワースの
説教・講話に通底する特質



山本 巍

この度、三上章著『ケンブリッジ・プラトニストの哲学的靈性』(リトン)が上梓された。このずしりとした手応えのある重厚な作品の誕生を喜びたい。三上氏は先に同じ出版社から『プラトン』『国家』におけるムウシケウ』を出版しており、ギリシャ哲学の研究者として地歩を確かなものにした上で、本書の出版となったものである。書名に含まれる「哲学的靈性」という言葉にすべてが象徴されている。キリスト教牧師としての信仰と哲学研究の一種総合ともいべき形で本書が誕生したのである。これは日本の精神風土ではなかなか現れにくい。それだけに意義な一歩だと思われる。

「ケンブリッジ・プラトニスト」と聞いても、一般の読者には馴染みが薄いかもしれない。政治と宗教の両面にわたって市民生活が混迷を深めた一七世紀の英国で、ケンブリッジ大学に籍を置いて精神生活の指導者となった聖職者にして教師たちのグループである(著者三上氏にとって鏡の位置にある)。その名の通りプラトニ学派の系統を継いだ「ギリシャ哲学を既成のキリスト教に接ぎ木しようとした」と言われる。

接ぎ木とは言っても、ただ木に竹を接ぐようなことであってはなるまい。本書の特徴は、二本の木がどのように接ぎ木され、ギリシャ哲学の生命線がキリスト教の生命線に繋がって、より力強い一本の木になっていくか、を示して見せることにある。そのためにケンブリッジ・プラトニストの中の三人を取り上げ、その説教、講話を詳しく検討し、そこで言及されるギリシャ古典を源に遡って徹底的に調査して、両者の照合をほぼ完璧なまでに仕上げていく。それが第二の特徴である。

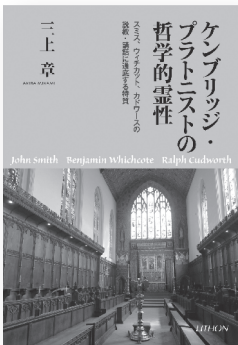
キリスト教にギリシャ哲学を接ぎ木する、といえば、われわれは直ちに一三世紀のトマス・アキナスを思い出す。トマスは、ギリシャ哲学のいま一つの軸であるアリストテレスの哲学とキリスト教を徹底的に突き合わせて体系的に総合し、伝統的キリスト教神学を刷新した。しかしケンブリッジ・プラトニストでは聖職者として実践的生活の中で行った説教と講話が中心であり、ゴシック建築にも譬えられたトマスのような徹底した体系化はない。その代わりそれぞれに自分の生活現場で、「理解を求める信仰」の生きた具体的な姿を三人三様に示している。

本書を通読して受ける印象は、全体が明るいということである。そしてそれはギリシャ本来の人間主義と広義のプラトニズムのもつ明るさに通底する。それは人間の理性に対する信頼がもたらすものである。著者が言う「哲学的靈性」を貫くのは、信仰に裏打ちされた理性のもたらすこの明るさであり、理性が神を起源とも根拠ともすることへの信頼である。そこには自由の息吹がある。「真理は汝らをして自由ならしめん」と聖書にもあるとおりである。三人のケンブリッジ・プラトニストが、争いと混乱を極めた困難な社会情勢の中で独断論にも權威的教条主義にも陥らないで、柔軟にかつ強靱に生きえた所以であろう。

しかし疑問がないわけではない。理性が善を認識する能力であり、その能力が人間の能力である限り、どんな人間にも神の痕跡がある。そこで善そのものである神に似たものとなる神化「内なるキリスト」が開けることにもなる「明るいキリスト像」

を著者は指摘する。重要な論点で興味深いのが、理性を「わたしたちの内なるキリスト」と呼ぶ点も含めて、こうした一種の内主義はいっそう厳密に考察する必要があると思う。その三人と似た立場にいる著者三上氏が、今後ギリシャ哲学の研究をもって「聖書の言語」にさらに肉薄されんことを期待する。そこにはギリシャ哲学とキリスト教の非連続性も十分配慮することが不可欠である。パウロがアテネはアレオパゴスの丘で「死者の復活」を告げた時、人びとは「そんな馬鹿な」と一笑に付したのである。容易ならざる非連続性の一例である。連続・非連続を組み込まないと、「接ぎ木」にはなるまいからである。

(やまもと・たかし 東京大学名誉教授
A5判・四八九頁・本体四〇〇円+税・リトン)



ケンブリッジ・プラトニストの哲学的靈性

スミス、ウイチカット、カドワースの説教・講話に通底する特質

三上 章 著

●A5判上製 本体4,000円+税

「どうしたら、聴く人にわかる言葉で心に通じる説教をすることができるか」という課題のもとに、17世紀のケンブリッジ・エマニュエル学寮出身の神学者三人の思想を取り上げ、共通する発想をギリシャ哲学原典をふまえて明らかにする。

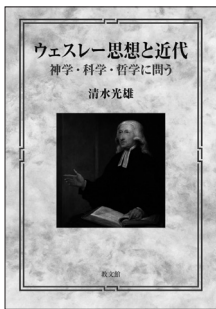
ISBN978-4-86376-055-4

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

ポスト世俗化時代のジョン・ウエスレー像
清水光雄著

ウエスレー思想と近代 神学・科学・哲学に問う



東方敬信

本書において清水氏は、ウエスレー研究が一九八〇年代を境に激変したと考えている。それは宗教改革以来の西方教会の神学的伝統の中でジョン・ウエスレーは個人的救済に情熱を傾けた福音伝道者と理解されてきたが、一九八〇年以降は東方教会の霊性を離れては理解できないという強調点の変化による（二七頁）。評者は、二一世紀のグローバル資本主義の世界観の問題を啓蒙主義型の近代的社会構築の終焉とその克服に見ているので、経済学の父アダム・スミスと同時代人であるウエスレーの神学的社会倫理に注目してきた筆者の線に触れ合い、二一世紀の「ポスト世俗化時代」の課題として大いに刺激を受けている。読者もその点に積極的に触れて欲しいものである。

その点で清水氏は師である野呂芳男氏を度々取り上げその「実存論的解釈」を乗り越えようとしている。筆者はウエスレー神学の特徴の背後に、英国教会が重んじた東方教会の神父たちや、社会学者パーソンズが指摘しているホブズ問題（エゴイズムと暴力を抱え込んだまま）を含む近代社会理論を克服できていない社会・共同体論をイメージするリバイアサン像と

は異なる社会・共同体論を発見させてくれる。それは神の愛と信仰の確証（八九頁以下）から生み出される新しい共同体である。それを清水氏は「確証体験の喜び・愛・平和から隣人への愛がほとばしる」（一〇〇頁）と表現している。この土台の上に、ウエスレーは、モラヴィア派から学んだ教育の使命また貧困者や病者に対する愛の使命によって、さらに先行の恵みという「自然の光」と「啓示の光」の両者を認める「普遍的救済論」を展開して、国教会の再生運動としてのメソジスト派を指導したのである。

今一度私たちは、著者に「ウエスレーの伝道企画に現在の私たちの教会はどのように返答するのでしょうか」（二〇四頁）と問いかけられる。そして何よりもウエスレーから学ぶべきは、救済の治癒的理解となる。それは私たち人間の神の像の歪曲あるいは喪失という罪の現状から、イエス・キリストとの出会いによって第二のアダムであるキリストに倣う者となり、神の像への回復に与ることによって完成することにもなる。「救いの目的は信仰で天国に行くことではなく、原初の状態を回復し、

神的本性の生命に参与することで神の像を回復すること」（一〇九頁）とウエスレー神学の豊かさを清水氏は表現する。これがまさに「ポスト世俗化時代」の神学となる。

そして、啓蒙思想や英国教会とメソジスト運動の葛藤を意識して、「思慮深い大衆の成長」を願って教会史家アウトラーが「民衆の神学者」としてウエスレーを「評価した」ことも本書は紹介している。さらに私はアダム・スミスも『国富論』でメソジスト運動を評価していることを指摘しておきたい。そして二一世紀の高度経済成長後のグローバルゼーションに席巻されている日本社会において、改めて「神学・科学・哲学」に対して当時のウエスレーがどのような判断と主張を提供したかを学べる好著であることも推奨したいと思う。

本書のタイトルが「ウエスレー思想と近代」とあるように、近代社会の形成との関わりでキリスト教信仰の意味を語っている後半は、その点できわめて興味深い。紙面の都合上概略になるが、近代諸科学の展開との対話、さらに私たちの現状の社会の成立過程における長所・短所を垣間見ることができ、二一世紀に生きる者としては喜ばしい。また、一七、一八世紀の自然

科学の展開におけるニュートンとキリスト教信仰の関わり、医学や健康観、解剖学や生物学に関心を抱いたウエスレーの当時の医療技術の展開への見解、さらにキリスト者全てが身に着けるべき「全身全霊で神と人を愛し、思いも言葉も行為もこの愛で支配される」（二一八〇頁）という今日的な意義が考察される。そこには「行動の習慣」が含まれ、ロック、マルブランシュ、ブラウンなどの哲学が論じられ、それらとウエスレーの信仰理解との対話も紹介されていく。そして、近代化のプロセスの中で「聖俗革命」をどのように把握していけばよいのか、また修道士ペーコンの「知は力なり」に代表される近代科学における教育機関の意味など、二一世紀に生きる者には重要な緊急課題に触れることになるであろう。この点で、著者によるなら、

「愛の実践」を軸にして諸科学の成果を用いることになる。
新しいウエスレー理解の展開とキリスト教信仰とポスト世俗化時代のキリスト教実践の絡み合いを学ぶのに、本書は大きな役割を果たすものであり、多くの読者に手に取っていただきたいものである。
（とうほう・よしのぶ「青山学院大学名誉教授」）

（A5判・四五八頁・本体三〇〇円＋税・教文館）

キリスト教的靈性と実践の本質に迫る
梶原直美著

オリゲネスの祈禱論
『祈りについて』を中心に



久松英二

本書は、オリゲネスの『祈りについて』（以下『祈り』と略記）に見られる祈りの思想をテーマに、聖学院大学大学院に提出された学位請求論文に若干の修正が施され、「関西学院大学研究叢書」第一八七編として発表されたものである。「序論」「本論」「結論」の三部構成で、「序論」では、『祈り』の概要が述べられたのち、同書を研究対象とした動機と目的が、現代に生きる我々にとって、「自らの人生を支え導くものとしての祈り」（四二頁）の意義を『祈り』から学ぶことだと説明され、『祈り』の研究史概観へと続く。

「本論」は全五章からなっている。第一章「御父への祈り」では、オリゲネスが「祈り」を意味する用語として「エウケー」（祈り）と「プロセウケー」（禱り）を使い分け、前者は祈り一般を指すものとして用い、また後者については、一テモテ二章一節を典拠に「より大いなることをより気高く求める者によってささげられる祈り」としてこれを理解し、ここにオリゲネス自身の祈禱観が投影されている、と著者は説明する。すなわち、この「禱り」は、ロゴスとして完全な神の像であ

るキリストが人間に神を示し、バラクレトスとして人間の魂を聖化して神にふさわしい状態へと高める聖霊のそれぞれの仲介によって御父にささげられるという。この両ペルソナの祈りにおける役割、また祈る対象である御父がいかなる存在であるかを論じたのが、第二章「祈りにおける聖霊と御子の参与」である。第三章「魂の糧を求める祈り」では、三位の神との関わりの中で人はどのように祈るべきか、について考察されている。オリゲネスは『祈り』の中で「ふさわしい祈り」の例として「主の祈り」における「パンを求める祈り」を引き合いに出す。彼によれば、「パン」とはロゴスたるキリスト自身であり、魂がこのロゴスに養われながらこの世での学びを重ね、浄化されていくことを願う祈りこそ、ふさわしい祈りだと力説する。第四章「試みと愛」では、「主の祈り」における「わたしたちを試みに遭わせないで悪しき者（著者によれば、オリゲネスは抽象名詞としての「悪」ではなく、人格的存在の「悪しき者」と解釈している）からお救いください」という部分の注解と、オリゲネスの『殉教の勧め』

を中心に、「試み」と「悪」の意味、また「負い目」として解釈される「愛」について、オリゲネスの思想を明らかにする。最終章の第五章「祈りへの応答」では、祈りによって神から与えられる「恩恵」について考察される。すなわち、祈りは神と関わることを選ぶ意志の表明であり、恩恵とは、この意志に対する神からの応答である。この恩恵が付与された結果、祈り求める人間は、その求めたことの具体的な実現以上に、神との関係に信頼や愛を選ぶようになるとされる。

以上、「本論」における検討の結果、著者は「結論」において、オリゲネスの祈禱観を次のようにまとめる。すなわち、彼の祈禱観の背景には、「実体」としての不可視の世界とその「陰影」としての可視の世界という二重構造があり、真の祈りが求めるべきものは「陰影」ではなく、天上の「実体」であること、つまり、神は、その「実体」に相当するものを求めることを人間に望んでいること、さらに、この世は万物の

回復（アポカタスタシス）へと向かうプロセスであって、怠惰によって自身から離反し、罪によって弱められた魂はこのプロセスの中で浄化され、神の似姿性に基づく本来の自己を回復しようとするが、神はこのような魂を見捨てず、学びを経て回復するよう導く。それが御子と聖霊の派遣の意味であり、このような神の愛に全面的に信頼を置いてささげられた祈りこそ、真の「禱り」である、と締めくくる。

本書は、全体を通して、議論の焦点がやや絞りにくい傾向にはあるが、オリゲネスの祈禱論という極めて特殊なテーマを、現代に生きる信仰者に意義あるものとして捉えなおそうとする著者の真摯な熱意が伝わる研究である。

（ひさまつ・えいじ＝筑谷大学教授）
（A5判・三三三頁・本体四〇〇円＋税・教文館）

キリスト新聞社の本

関西学院大学神学部ブックレット9
平和の神との歩み
1945-2015年 第50回神学セミナー



この時代に生きるキリスト者として
世を越えて平和の問題を正面から考える。

関西学院大学神学部●編
■A5判・140頁・1500円＋税
関田寛雄／奥本京子／東よしみ
岩野祐介／加納和寛／水野隆一

WCC第10回総会報告

いのちに向かって共に
教会

現代世界エキュメニカル運動における
二大重要文書

宣教のための
エキュメニカルな共通理解への
新たな一歩

WCC世界宣教伝道委員会
信仰職制委員会●編
西原廉太●監訳
村瀬義史・橋本祐樹●訳

【目次】
いのちに向かって共に
1 宣教の霊—いのちの息吹
2 解放の霊—周縁からの宣教
3 共同体の霊—躍動する教会
4 ペンテコステの霊—
天地万物のための福音
教会—共通のビジョンを目指して
第一章 神の宣教と教会の一致
第二章 三位一体の神の教会
第三章 教会—交わりにおける成長
第四章 教会—世において、
そして世のために
■A5判・216頁・本体2,500円＋税

キリスト新聞社 since 1946
〒162-0814 東京都新宿区新小川1丁目 9-1
TEL 03-5579-2432
E-Mail support@kirishin.com

さらなる西方教会理解にも必須の書
J・フエンネル著
宮野 裕詔

ロシア中世教会史



竹内謙太郎

まず、本書の発刊に対して、キリスト教理解への重大な貢献という意味で感謝したい。とりわけ日本においては、キリスト教とは「ヨーロッパ・アメリカの」という前提で語られることが一般的である環境であるが、皇帝コンスタンティヌスがニケアに第一回の公会議を招集して以来、当時ゲルマンの侵入によって混乱を極めていたローマより政治的安定を確保していた小アジアにおけるキリスト教は国家権力の庇護をより強く受けていたと言える状況にあった。西方では社会の秩序維持にローマ教会は重大な責任を負ったが、それは同時に世俗権力との絶え間ない対立と抗争という結果を生み出す原因ともなった。しかし、東方でのキリスト教会の状況は、国家権力との一体化が進まれ、手厚い国家の庇護をうけると同時に、実質的な国教化が存在の底流となっていた歴史の経過がある。東方ではそれ故、キリスト教会は常に国家との一体化という基本的条件によってその社会での位置づけがなされて来た。

西方教会の歴史はローマ教会（教皇）と神聖ローマ帝国（皇帝）の対立・抗争・妥協の歴史であると言えるだろうが、東方

においては、それは常にキリスト教会が国家とその運命を共にする状況に置かれるという必然性、そしてその根底にはキリスト教会が国家の下に置かれているという基本的位置づけにあったのである。キリスト教会はそのゆえに国家の変動や変貌に直接的に影響を受けてきた。本書はそのような東方教会のキリスト教会としての重要な特質について極めて重要、かつ、本質的な理解への手引きを提供されているという意味で、キリスト教理解の全体像への最も重要な基本的文献であると言えるだろう。大部の本書の原文の雰囲気や再現する訳文には流麗さもあって、より深い理解が可能にされていることに感謝したい。十二世紀から十五世紀に至るまさに中世というべき時代区分において、西方とは全く異なるキリスト教会の状況、西方における国家権力（世俗権力）との対立とは異なった特質が評述されキリスト教会の歴史におけるその多様性と多彩なキリスト教会の姿、とりわけ一般社会、政治的社会に直面するキリスト教会の姿が明らかにされていることに本書の重要性は明らかと思われる。訳者のご努力によって一般の研究者にとっても通過すべき道が

開かれたことを多としたい。

キリスト教会が国家機関とほぼ同一の位置づけがされているという東方の状況理解は、恐らく従来の西方キリスト教会の状況にのみ触れてきた一般的な日本社会のキリスト教理解にとつては、時にはキリスト教会に対する否定的批判を惹起するかもしれない。しかし、西方における教会と国家の対立概念という基底において理解してきた従来の教会と国家の関係は、ここで本書によっていったん整理されるのではないかと思われる。さらにロシアと接する民族的にも異質なモンゴルとの関係にも触れながらロシアの地理的、歴史的位置づけを確認していることも重要な側面と言えるだろう。東欧諸地域における政治的、社会的な変動は国家・社会と一体化してきた教会にとつて、教会における変動でもあった。中世ロシアにおいて培われたこの教会と国家の一体化した関係は、本書の扱う中世に始まり、革命の時代に対しても強烈な影響を与えたのである。この課題にとつて重要な歴史的事件がまさに東方教会の中心的な地位にあ

ったロシアに起こった。ボルシェヴィキ革命である。この時はど東方教会の特質が露わにされた時はなかったのではないかと。教会が革命に対してどのように対処したか、革命が社会、国家の動向とすれば、これまで、国家の動向に自らを一致させてきた教会がどのように自らを律したか、本書はその根源を多様な事実に基づいて暗示してくれる。

現在を理解するために、過去、とりわけ中世社会の理解が必須であるという自明の事柄がここでも立証されている。西方教会理解にとつて本書が扱う東方教会の状況の評述が、いかに必須であるかを強調しておきたい。あらためて本書の邦訳を志され実現された訳者に敬意を表し、出版に努力された教文館に感謝したい。

（たけうち・けんたろう）日本聖公会退職司祭
（A5判・三八八頁・本体五〇〇円＋税・教文館）

オリジナルソングも誕生した本書。まさに超教派の面々による「神」という巨象」を焼き火を囲む仲間と多いに語り明かした画期的な大頭ワールド！抱腹絶倒な読む神学！「対話 大頭真一」／高橋秀典／水谷潔 久下倫生 中村佐知／山崎ランサム和彦／川向肇／豊田信行／上沼昌彦 吉川直美 古川和男 大坂太郎 久保木聡（解題）祝辞・応接 谷口和一郎／平野克／岩瀬まこと／小淵春夫／マリア 松島純子／大嶋重徳 小平恵 月刊『舟の右側』連載を元にした書下ろし対話篇！ ●四六判・三六八頁・本体一五〇〇円＋税

焚き火を囲んで聴く神の物語・対話篇 大頭真一と焚き火を囲む仲間たち

焚き火を囲んで聴く神の物語・対話篇 大頭真一と焚き火を囲む仲間たち

話題沸騰中！

「焚き火を囲んで聴く神の物語」は、大頭真一と焚き火を囲む仲間たちによる、神の物語と対話の集大成。大頭真一と焚き火を囲む仲間たちによる、神の物語と対話の集大成。大頭真一と焚き火を囲む仲間たちによる、神の物語と対話の集大成。

焚き火を囲んで聴く神の物語・対話篇 リンク集 鋭意準備中

大頭真一の本 コミュニティセンターや家庭集いのテキストに、学校の教科書で好評！

聖書は物語る ― 一年12回で聖書を読む本 ●4版・一、二〇〇円

聖書はささぐらに物語る ― 一年12回で聖書を読む本 ●再版・一、二〇〇円

神の物語上・下 7月上旬刊行予定 ●ヨベル新書各巻目録 四〇〇円

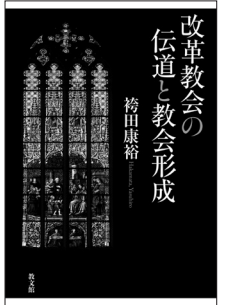
聖書は物語る ― 一年12回で聖書を読む本 ●再版・一、二〇〇円

神の物語上・下 7月上旬刊行予定 ●ヨベル新書各巻目録 四〇〇円

株式会社ヨベル YOBEL Inc.
お問合せは info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
*自費出版の専門出版社*資料・呈

「健やか」な教会を建て上げるにはどうすればよいのか？
袴田康裕著

改革教会の伝道と教会形成



関川泰寛

本書は、日本キリスト改革派教会の神戸改革派神学校教授袴田康裕氏による講演集です。「キリストとの出会い」という個人の救いの経験から始まって、「日本キリスト改革派教会の課題と展望」、「教会政治を考える」、「長老主義教会の課題」、「伝道者の養成について」など、どの講演も現代日本の教会の喫緊の課題を取り上げて、分かり易く論じています。その論じ方は、改革教会の弁証には走らず、むしろ普遍的な信仰や神学の課題を扱っているのです。伝道と教会形成に関心を持つすべての牧師と信徒に必読の書と言えるでしょう。

全体から、日本に健やかな教会を形成するために伝道したいという熱意が伝わってきます。読んでいて私自身が共感し、皆様にもお伝えしたい本書の論点を要約する形で紹介してみましよう。

第一に、教会の伝統について、袴田氏は、変えてはいけないものと変えるべきものをしっかり識別するように勧めています。日本の改革教会は、聖書と並ぶ伝統の意義をはき違えて、いわゆるこれまでの教会の慣習を墨守することを伝統の保持と考え

ている場合が少なくありません。真の伝統は、信仰告白そのものの讚美・頌栄というダイナミズムと密接な結びつきがあるゆえに、伝統を保持すること自体が、教会を御言葉によって刷新する力となります。

第二に、教職者のみならず信徒の伝道力の回復の必要性です。いまだに教会では、わたしたちはお客さんという姿勢が見られます。お客さんでは、主のために奉仕する志は湧き上がりません。自分がクリスチャンであることをしっかり証して現実を生きたる時、「ハブニング」が起ります。「ハブニングとしての伝道」をせよとの興味深い指摘もあります。わたしは、袴田氏の議論に全面的に共感します。伝道すると否跡が起る、これはすべて伝道に召されている者の経験的な実感でもあります。

第三に、信仰告白の意義の再認識が促されています。信条や信仰告白は、持っているだけでは意義がありません。そこに示された教理の深みと讚美・頌栄としての意義を認識して、牧師と信徒が奮い立つ経験が求められています。

第四に、神学校教育の重要性です。袴田氏は、「伝道者の養

成について」という章を設けて、神戸改革派神学校の歴代校長の教育理念を紹介し、さらにキリストの三職から、今牧師・伝道者に求められている課題を論じています。現代日本の神学校が、神学的な考察や能力の涵養のみならず、将来牧師となる伝道献身者の霊性と道徳的な成長をも担うべきことが示されている、大きな共感を持って読みました。また、「教える」ということの歴史的考察の章では、アウグスティヌス、カルヴァン、そして一九世紀のエディンバラ大学の神学教授にしてニューカレッジの創設にあたったトマス・チャーマーズの教育論を紹介しながら、神学校と神学教育の現代的な課題を論じています。特に今まであまり紹介されることのなかった、スコットランドの教会分裂と神学教育の分かり易い解説とニューカレッジの神学教育の特徴の紹介は、有益で新しい知識を読者に提供するでしょう。

最後に、改革教会は、国家の問題を、単なる社会問題として

ではなく、信仰の問題として取り組んできたことが指摘されています。袴田氏は、信仰の問題としての政治の問題が具体的に複雑で多岐にわたっていることを認めながら、現代日本の政治の評価にまで踏み込んで議論しています。評者の立場は、袴田氏とは随分違っているのですが、この問題への切り込み方や論じ方には、なお不満もありますが、改革教会の伝統から、政治と信仰の問題を切り離すことなく論じる姿勢からは、おおいに学ぶことが出来るでしょう。いずれにしても、現代日本の伝道と教会の形成をまじめに考えている方々に推奨することが出来る一冊です。

(せきかわ・やすひろ＝東京神学大学教授・大森めぐみ教会牧師)
(四六判・二二八頁・本体一八〇〇円＋税・教文館)



信徒の手引き

日本キリスト改革派教会
大会教育委員会



わたしたちは、
聖書と時代からの問いかけに
どのように応えるのか、
信仰生活の道しるべ、
信仰の航路を導く灯台となる、
聖書と改革派信仰に
生きるための手引き。

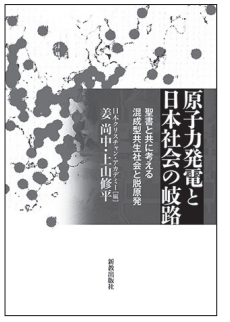
四六判・並製
定価 [本体 2,200 + 税] 円
ISBN978-4-86325-071-0



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢 3 丁目 4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

原子力発電と日本社会の岐路 聖書と共に考える混成型共生社会と 脱原発

キリスト者のあり方を問う
姜尚中・上山修平著
日本クリスチャン・アカデミー編



小中陽太郎

本書のカバーを彩る赤い稲妻は、一見、和紙に散った朱筆の雫と見える。読み進むと、一九九〇年から二〇年間、深さ一〇キロメートル以下のところでマグニチュード4以上の地震が起こった地点を示す地図に着想を得たものであると知る。その上に原発がある地点を重ねると、四つのプレートが重なりあう島国、すなわち日本列島は真つ赤に染まる。それはまるで地球を汚染する血のようだ。

本書は、二〇一二年秋に日本クリスチャン・アカデミーが催したシンポジウムの記録『原子力発電の根本問題と我々の選択』（二〇一三年、新教出版社）に続く、二〇一四年一月二一―二三日、同アカデミー関西セミナーハウスでの講演と話し合いの記録である（講演姜尚中、上山修平、総合司会小原克博）。

その全体の通奏低音として聞こえてくるのは、わたしたちはなぜこの悲劇をもたらししてしまったのか、キリスト者として何と世間に説明するのか、という痛恨の念である。

副題には「混成型共生社会」として望ましい社会のあり方を提示しつつ、本書では、日本社会のあり方が真つ向から裁

断されている。いわく「楽観主義」であり、「過去と向き合わず、――神の前に悔悟することを避けて、ただ未来志向を語ること」の危険性である。

この批判の対象には、冷戦時代のイデオログも含まれるだろう。反核運動を支えた平和運動家武藤一羊でさえ、当時は、「ソ連の核は平和の核」と信じた。後の彼の告白は、その率直さでわたしを打ったものだ（潜在的核保有と戦後国家）。

さて、講演者のひとり姜尚中にあつて際立っているのはその預言的な力である。彼は数年前の著書の中で、「いつの日か、満州国の亡霊である岸信介の孫が、将来日本の総理になるのではないか、朴正熙の娘（朴槿恵）が韓国の大統領になるのではないか」と喝破していたそうだ。これには心底、舌を捲いた。

他方、次の講演者たる上山修平は、工学部卒業後放射線CTの設計者をしたこともある牧師だが、その議論「今聖書から問う――核利用の根にあるもの」は、なぜ、中曽根康弘、正力松太郎は日本中に原発をつくらうとしたのかと問い、「そこでは、唯一の被爆国である日本こそ原子力エネルギーを平和的なもの

に活用しようという逆説的な論理が一般的なものになつていった」と見抜く。しかし結局、中曽根が予算化した2億3千5百万円が原爆のエネルギー源でもある「ウラン235」に投じられたとは、何たるブラックジョークか。ここは、祖父が広島語り部たりし小原克博（セミナーハウス運営委員。同志社大学も「だから、反核平和運動の先頭に立つべき、特別な使命がある」という思いを抱いてきた」と認めるところである。

また上山修平は、放射能について三つの危険を突きつける。微量放射線による被害、世代を超えた影響、生体内濃縮である。

その上で、廃絶の運動も大事だが、「聖書的に考えよ」と預言者エレミヤに立ちかえり、「お前たちは従わなかった」の言葉を引く。上山は、ここで過ちは、指導者、為政者だけの問題ではなく、そのことを許してしまった私たち民の側の問題だと叫んでいる。そして「地が生み出すものを」人間は収奪したと真つ向から指摘するのである。

分科会では、ドイツのクリスチャン・アカデミーと日本のクリスチャン・アカデミー（代表理事小久保正）の協力関係もあつて、国際的な具体的話し合いが活発になされた。ハイデルベルクの教会研究共同体が紹介されたり、沖縄への取り組み、韓国での聖書的な世界観の普及運動が紹介され、視野の拡がりを見せてくれる。

日韓北朝鮮をとりまく風雨激しき今、創世記の再読（上山―ヴェスターマン）によって、真つ赤に血塗られた地図を主の創造したもうた世界として描き直すための提言が、大河の水のように溢れている。



皆川達夫 著 キリシタン音楽入門

西洋音楽研究の大家が
キリシタン期における



西洋音楽伝来の実態をやさしく紹介する

洋楽渡来考への手引き

かくれキリシタンが歌い継いだ「歌オラシヨ」をはじめ、幻の「キリシタン音楽」の姿を探り続けた西洋音楽研究の大家が書き下ろす、待望の入門書。

四六判・184頁・1728円

皆川達夫の好評既刊

洋楽渡来考

キリシタン音楽の
栄光と挫折

A5判・642頁・19,440円

洋楽渡来考 再論

箏とキリシタン
との出会い

DVD付

A5判・160頁・6,912円

日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp 《価格8%税込》

http://bp-uccj.jp

（こなか・ようたろう）作家

（四六判・一八七頁・本体一五〇〇円＋税・新教出版社）

現代世界の緊急課題に取り組んだ優れた論考集！
小原克博・勝又悦子編

宗教と対話 多文化共生社会の中で



若名定道

現在、世界各地では、二〇世紀末からの混乱を引きずるかのようになり、紛争と衝突が繰り返され、日本においても軋轢と対立が深まりつつある。そこでしばしば焦点とされるのが「宗教」であり、二一世紀の問題状況は「宗教」の問い直しを求めている。こうした現状を理解する上で必読の論集が刊行された。テーマは、現代の多文化共生社会における「宗教と対話」であり、宗教学と隣接諸学問分野との対話（第一部）、異なる宗教・文化間の対話（第二部）、宗教と民主主義的な市民社会との対話（第三部）をめぐり、九つの優れた論考が収録されている。主に取り上げられるのは、いわゆる一神教であるが、それは、本論集が「日本宗教学会第七三回学術大会」（二〇一四年、同志社大学）の基調シンポジウムの成果を基にし、同志社大学一神学際研究センターにおける活動を背景にしているからにはほかならない。つまり、本書自体が、多文化共生社会における「宗教と対話」の実践記録なのである。以下、各部のまとめりに従って、注目すべき論点のいくつかを紹介しよう。

まず第一部では、現代政治、社会福祉、教育を主題に、宗教

と隣接諸学問分野との対話が扱われる。現代政治の視点から注目されるのは（第一章）、一九七〇年代以降の国際政治に対する宗教の影響力であり、そこからグローバル化の学問状況における国際政治学と宗教学のリンクエージの可能性（人口動態変化を焦点に）が検討される。これに対して、社会福祉と宗教との関わりについては（第二章）、キリスト教と社会福祉の対話の歴史（対話による創生から対話の断絶を経てその再開へ）が辿られた上で、スピリチュアリティを介した宗教と社会福祉との新しい関係が論じられる。論者が社会福祉におけるスピリチュアリティの豊富な実践事例によって示す提言は説得的である。そして、教育については（第三章）、「多文化共生という課題に対し、宗教教育がどれほどの貢献をすることができのだろうか」との問いをめぐり、論者が行っている宗教間教育の実践に具体的に言及しつつ、「憎しみの文化」「アイデンティティ・ポリテイクスの罨」を克服する必要性が説かれている。

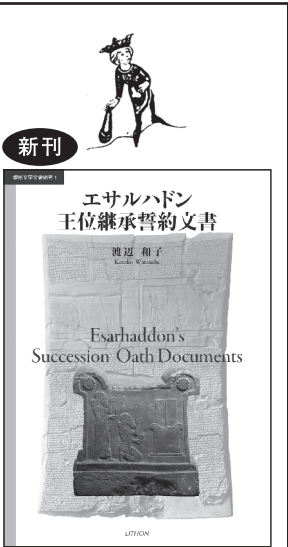
宗教間対話を扱った第二部の焦点は、「イスラーム」である（第五章は、エジプトのコプト正教会とムスリムがテーマ）。日

本では「イスラームは理解しにくい宗教」と思われており、また誤解（欧米からの情報によって増幅されたイスラームフォビア）が多いことを考えれば、読者には、まず第四章「宗教間対話運動と日本のイスラーム理解」の執説をお勧めしたい。そもそも「一神教」概念は近代的宗教論に基づいたものであり、「私たちは一神教と多神教といった枠を作ってしまうことなく、人間としての共通性を基盤として、イスラーム世界と日本との対話を続けていきたい」との主張には、同感である。また第六章では、西欧の理解する平和とイスラームの理解する条約との対応関係から、双方の理解のズレの明確化が試みられる。第三部のテーマは、ユダヤ教と民主主義である（第九章ではムスリム世界の奴隷制がイスラームの教義から由来したものであることが示された）。キリスト教と近代の民主主義的市民社会との関係については、これまで多く議論がなされてきたが、ゲットー解放後のユダヤ教が近代社会に対して有する意義の十

分な解明は、今後の研究課題にはかならない。ユダヤ教との関係で「近代」を掘りさげて論じるには、ユダヤ教自体の内容に踏み込んだ理解が必要であり、第七章、第八章の論考は、古代（ユダヤ教文獻の「自由」概念と「支配者」像）と中世（アバルヴァネルの聖書注解）を主題的に扱うものであるが、読者はこれらの章の議論の中に、西欧近代を相対化するための手がかりを見出すことができるであろう。

（あしな・さだみち）京都大学大学院教授

（四六判・三〇四頁・本体三〇〇円＋税・教文館）



エサルハドン 王位継承誓約文書

渡辺和子 著

●A4判上製 本体6,400円＋税

前672年にアッシリア王エサルハドンによって大量発行・配布された「エサルハドン王位継承誓約文書」は、粘土板に楔形文字のアカド語で刻まれている。それは、多様な文化的背景をもつ人々を擁する大帝國となったアッシリアにおいて、最高神アッシュル以下「全世界」の神々の前でアッシリア内外の要人たちに、次の王（皇太子）への忠誠を誓わせた誓約文書であった。本書は、近年トルコで発見された一つの新文書を含むテキストの再編纂、構成と文法の解明、全文の本邦初訳を含む。さらに本文の新しい解釈に基づいて、ユダ王ヨシヤの改革及び「申命記」、そして宗教史に与えた影響の可能性について論じる。

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

マルティンがマルティンから学んだこと

深井智朗

アドルフ・フォン・ハルナツクの父テオドシウスが言うように、「ドイツ人にとってルターは、「彼を批判する者であっても、また称賛する者であっても、他と比べようもない偉大な人物である」。だからこそ、ルターの生涯や思想を論じることが、ドイツの歴史やナショナリズムと切り離すことはできないし、政治の側でもルターの改革運動や思想を、自らの立場を正当化するために利用してきた。そのためであろう、一方ですべての歴史は偉大なるルターへと流れ込み、すべてはルターから始まったのだ、というようなルター像が描かれたりする。他方でそのようなルター解釈にうんざりした歴史家たちが、ルターの仕事に執拗に相対化し、非神話化してみせる。

この度来日するハンス＝マルティン・バルト教授は、一九六五年に完成させたルターの洗礼論に関する学位論文から、二〇〇九年に刊行された『マルティン・ルターの神学』まで、ルターと対話しながら自らの思想を構築してきた神学者である。バルト教授のルター研究の特徴は、ルターを相対化し、対話するための手法であろう。彼はルドルフ・オットー以来、宗教学研究でも有名なマールブルク大学の組織神学と宗教哲学の教授として、エキクメニカルな対話、そして諸宗教との対話を

精神的に続けてきた。大谷大学の招きで来日したこともあり、またマールブルクでは諸宗教対話のための研究グループを指導し、そこでの対話は日本語でも紹介されている。バルト教授の主張はもちろん宗教はいずれも同じだ、などというのではない。寛容や尊敬、相互理解のための対話は当然なことである。彼の考えは、自らの宗教的伝統への確信があるからこそ、他者と対話が可能になり、他者を他者として受け止めることができるというものであろう。

彼のルター研究はそのような他者との対話の作法の中から生み出されたものである。彼はルターから誰よりも学んでいる。しかし彼はルター以外の何ものも認めない偏狭な立場にとどまったのではない。かつてルターの改革自体がすぐに直面した、異なった宗派がどのように共存し、ひとつの社会的共同体を作ることが出来るのか、という問題と彼も今日の社会のコンテクストの中で取り組んでいるのである。

その意味で諸宗教をめぐるさまざまな対立と誤解の中で迎えた宗教改革五百年の記念にもっともふさわしいゲストを迎えられることを喜んでいる。

(ふかい・ともあき＝東洋英和女学院副院長)

宗教改革500年 記念ウィーク

宗教改革が
問いかけるもの

宗教改革500年

2017年は、宗教改革から500年の節目の年で、ローマ・カトリック教会とルーテル教会が、初めて共に宗教改革を記念する特別な年でもあります。この記念すべき年に、宗教改革が歴史・社会・文化に果たした役割や、宗教改革の今日的意義について考えてみませんか。

2017年9月12日(火)～9月22日(金) ※定員になり次第締め切ります。お早めにお申し込み下さい。

記念展示会

10:30～18:00
(最終日12:30～17:00)銀座教会
東京福音会センター2017
9/12(火)
-17(日)

入場無料

「宗教改革が文化に及ぼした影響」

◆レクチャー

- 9月15日(金) 宗教改革時代の美術
佐川 美智子氏(元町田市立国際版画美術館 副館長)
- 9月16日(土) 宗教改革と音楽
藤原 一弘氏(青山学院大学、北海道大学非常勤講師)
- 9月17日(日) 聖書の装丁の歴史
中西 保仁氏(印刷博物館学芸員)

※レクチャー参加の方は、お申込みが必要です。
電話 03-3567-1995 Eメール: lib@bible.or.jp

エキクメニカル

晩餐会※

18:00～20:30

帝国ホテル 光の間2階

会費18,000円(コース料理付)

講師 江口 再起氏

(ルーテル学院大学教授)

「贈与の神学者ルター」



音楽ゲスト MCSメサイアコーラルソサイエティ合唱団
指揮者 小田 彰氏(ライトハウス田園調布チャペル牧師)

記念講演会※

14:30～16:30

有楽町朝日ホール

会費1,000円(定員600名)

講師 ハンス＝マルティン・バルト氏

(マールブルク大学名誉教授)

2017
9/18
(月・敬老の日)「現代世界における
宗教改革の意義」

記念コンサート

「Hope & Love」

東京オペラシティ
コンサートホール

18:30 開場 19:00 開演

◆PROGRAMS

J. シベリウス 「フィンランディア」
HANDEL 「メサイア」ハイライト 他
SS席 ¥5,000 S席 ¥4,000 A席 ¥3,000 B席 ¥2,000
指揮: 星野 誠
ソプラノ: キム・スヨン テノール: イ・ヨハン
東京シモンフィルハーモニーオーケストラ
東京シモンコーラス 根津コーラス

《チケットお問合せ》■東京オペラシティチケットセンター03-5353-9999 ■チケットぴあ 0570-02-9111 ■東京シモンコーラス事務局 03-3351-6004 ■アークノアコンサート 090-2847-3773

宗教改革500年記念行事のために、
お祈りとご支援をお願いします。

JBS 日本聖書協会 (ご連絡は広報担当まで)

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 Eメール: info@bible.or.jp

TEL.03-3567-1988 FAX.03-3567-4436

記念ウィーク
特設サイト→
チケット申込こちら

本屋さんを選んだ お勧めの本

教文館キリスト教書 加川昌宏

『新約聖書 解釈の手引き』

浅野淳博・伊藤寿泰ほか著



3,200 円+税
日本キリスト教団出版局

一点目にお勧めするのは、二〇一六年二月、日本キリスト教団出版局刊行の『新約聖書解釈の手引き』。二〇一七年刊行が開始される日本語で書き下ろす聖書注解シリーズ、NTJ新約聖書注解、その監修者会構成メンバー六名と関西学院大学の前川氏、村山氏の二名を加えた八名による新しい新約聖書の手引きです。聖書学のさまざまな手法をわかり易く解説し、その手法で聖書を読むと「何がわかるか」を解説しています。新約聖書をさらに深く読みたいすべての人にお勧めします。

『プロテスタン ティズム』

深井智朗著



800 円+税
中央論新社

二点目にお勧めするのは、中公新書『プロテスタンティズム——宗教改革から現代政治まで』です。本年はルター期の宗教改革から五〇〇年。キリスト教のみならず、世界的規模で政治や文化に強い影響を及ぼしたプロテスタンティズムについて、東洋英和女学院大学人間科学部教授の深井智朗氏が、こなれた文章で解説し、その内実を明らかにします。現代の保守主義、リベラリズムの源流を分量的にも読みやすい新書でお届けします。

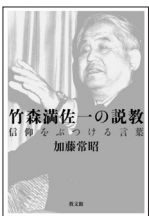
教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4丁目5-1
TEL: 03-3561-8488
FAX: 03-3563-1288
URL: <http://www.kyobunkwan.co.jp>
E-mail: xbooks@kyobunkwan.co.jp
ネット通販室イーショップ
<http://shop-kyobunkwan.com/>

北海道キリスト教書店 長束賛美

『竹森満佐一の説教』

加藤常昭著



2,900 円+税
教文館

どうして著者・加藤常昭先生はここまで竹森先生の説教をお薦めするのだろうか？という関心から本書を読み始めました。私も心燃やされる説教を聞いてみたい、と思っただけです。

読み進めていくと、私はトマスのように「わが主よ、わが神よ」と慕い求めるように呼びかけることができるのだろうか、という疑問が湧いてきました。罪のせいで神様との関係性が遠いように感じたからです。しかし竹森先生は言われます。「ほんとうのいのちというものは、いつでも生き続けているものでありましょう」。さらに読み進めていく内、私の中に生きていく信仰の芽に、チヨ口チヨ口と少しずつ水が注がれていくように感じました。

聖書は信仰を持って自由に読めばいい、ということも書かれています。竹森先生の語り口を想像しながら、また聖書から感じる神さまの声を耳を傾けながら、ゆったりとした時間をお過ごしください。

『ビジュアル大百科 聖書の世界』

マイケル・コリンズ総監修



30,000 円+税
明石書店

聖書の物語を追いながら、様々な知識を堪能できる大百科です。一番のおすすめポイントは、見開きの2ページに一つのストーリーがまとまっていること。もう少しこの聖書の、この箇所の知識が知りたいと思った時に手軽に調べることができます。

美しい絵画や写真も盛りだくさんなので、最初のページから読み進め、興味のある部分を楽しむ読み物としてもオススメです。また、物語を追っていくと、その合間、合間に聖書の世界の当時の文化（結婚、動植物、装いなど）を味わえるコーナーがあるのも魅力の一つです。是非、教会にあってほしい一冊。教会の記念行事のプレゼントなどにいかがでしょうか。

北海道キリスト教書店

〒060-0807 札幌市北区北7条西6丁目、北海道
クリスチャンセンター内
TEL: 011-737-1721
FAX: 011-747-5979
URL: <http://www.jp-shop.com>
E-mail: kameeka@jb-shop.com

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zeninkan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-36 敷島センター1771F	022-223-2736	共用		fcqwks524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区稲佐2-2-1	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書局	350-1331	埼玉県狭山市新狭山1-5-1	042-900-2771	042-900-2722		seikoshoten@bible.or.jp	00160-2-18410
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	03-3333-6378	http://taisindo-books.jimbo.com/	taisindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www7.biglobe.ne.jp/~yohatara.cbs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://homepage3.nifty.com/seibunsta/	nagoya-seibunshra@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東1-1	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびびりの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	共用		kobe-kirisyo@mse.biglobe.ne.jp	01150-7-45120
広島聖文舎	730-0841	広島市中区布入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/masujama_1007/mexim	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用		kbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	903-0207	中野区調子字線777 沖縄キリスト教館内	098-943-7221	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

※ 一般書店関係の方は、日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

旧約聖書の積義

本文の読み方から説教まで

D・スチュワート著／山吉智久訳

＜ブライ語で旧約聖書を読むためには？ 積義の基礎から実践までを段階を踏んで解説。聖

戦後来日した外国人宣教師たちから聴取を行い、証言の中にとどまり信仰の本質が具現化する実践基礎神学に基づき再解釈した文化考証史的研究にも先行的な研究。

A 5判・272頁・本体3800円

INFORMATION

近刊情報

■新教出版社

キリスト教思想史Ⅱ——アウグスティヌスから宗教改革前夜まで

フスト・ゴンサレス著／石田 学訳

教理史・教会史で数々の名著を著している著者の主著となる「キリスト教思想史Ⅱ」全3巻。第2巻は古代末期から中世末期にいたる千年あまりの間に、キリスト教思想がいかなる変化を遂げていったかを、単なる思想的な運動としてではなく、社会的・経済的文脈との関連に注目しながら生き生きと叙述。歴史家としての著者の面目が躍如する巻。

A 5判・432頁・本体予価5000円

待ちつつ急ぎつつ——キリスト教講話集Ⅳ

井上良雄著

戦後、キリスト者平和の会で活動、また東京神学大学で教鞭を執りつつバルト「和訳論」全巻の翻訳に打ち込み、日本基督教団の社会委員長を歴任するなど、一信徒として教会に仕えた井上。没後に書庫で発見された14冊の説教ノートから復元、校訂された説教・講演を全4巻に集成。この最終巻には60年代から90年代までの11編の発言を収録。

新書判・300頁・本体予価1700円

■教文館

「神」の発見——銀文字聖書ものがたり

小塩 節著

著者がスウェーデンで出会った、国宝「銀文字聖書」。数々の動乱をくり抜け、一五〇〇年の時を超えて現存する聖書の謎に迫る！

四六判・176頁・本体1500円

キリスト者の証言——人の語りと啓示に関する実践基礎神学的考察

原 敬子著

戦後来日した外国人宣教師たちから聴取を行い、証言の中にとどまり信仰の本質が具現化する実践基礎神学に基づき再解釈した文化考証史的研究にも先行的な研究。

A 5判・272頁・本体3800円

書をおぶすすべての人にとって不可欠の手引き。好評既刊「新約聖書の積義」の姉妹編。待望の翻訳！

A 5判・272頁・本体3500円

二つの宗教改革——ルターとカルヴァン

H・A・オーバーマン著／日本ルター学会、日本カルヴァン研究会訳

宗教改革の思想的潮流を中世後期から説き起こした神学の最後の論文集。宗教改革研究を政治的・文化的・神学的に統合した名著。

A 5判・320頁・本体5000円

■日本キリスト教団出版局

シリーズわたしたちと宗教改革 全5巻

第1巻 歴史 わたしたちは今どこに立つのか

藤本 満著

一五一七年に始まった宗教改革のうねりは、ヨーロッパ全土、そしてイングランドを刷新し、アメリカへと伝わった。さらに遠く日本へと、宣教師がその信仰をもたらした。現代日本に至るまで、プロテスタント信仰がたどった遠かな旅を描く、画期的な宗教改革史。

A 5判・256頁・本体2400円

シリーズわたしたちと宗教改革 全5巻

第2巻 聖書 神の言葉をどのように聴くのか

大住雄一著

「聖書のみ」と改革者は言い切った。それは「聖書のみ、神の声を聴く」という信仰の宣言である。律法と福音、「聖書と説教」「近代の合理主義と聖書」など、いくつもの切り口を通して、「聖書のみ」というプロテスタント原理が有する豊かな意味を明らかにする。

A 5判・120頁・本体1400円

宗教改革と現代の信仰

倉松 功著

五〇〇年前に始まったルターの宗教改革。「恵みのみ、信仰のみ」「万人祭司」などの宗教改革の基本から、宗教改革を支えた信仰と神学が、のちのバルメン宣言やドイト憲法、人権思想や教育など現代社会に与えた影響を解き明かし、その精神とわたしたちの信仰とのつながりを説き起こす。

四六判・112頁・本体1500円

福音と世界

2017年7月号

特集 改革しつつけるアジアの教会

寄稿者 山本俊正、宇井志緒利、志村真、藤原佐和子、ナグネ、松谷暉介

日本・在日・韓国 女性神学フォーラム 呉寿恵

好評連載 台湾キリスト教史（高井ヘラー由紀）、

現代神学の冒険（吉名定道）、詩篇（月本昭男）、

第一テモテ書（辻学）、レヴィナスの時間論（内田樹）、アメリカの神学と教会のいま（吉松純）、

聖書とわたし（中村うさぎ）ほか

A5判・本体588円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyu-pb.com

編集室から

今年度より「本のひろば」編集委員会に加えさせていただきますました。創刊六十年（創刊時は「興文」、一九七六年改題）を迎える本誌は、ちょうど私の年齢の倍です。キリスト教書を通じて、文書伝道の一翼を担ってきた諸先輩方に敬意を払うと共に、自分にそのような役割が務まるだろうかと不安にかられています。わからないことばかりの毎日です。幼い時より教会には通っていましたが、受洗したのは数年前です。父が牧師をしています関係で、家にはキリスト教書が多く所蔵されていますが、あまり読むこともありませんでした。そんな状況のまま、キリスト教出版版界に入ったので、業界の「常識」が通じません。神学者は名前しかわからないし、組織神学の基礎知識やキリスト教史の知識にも欠けています。生来の読書量の少なさからか、文章力もあるとは言えません。編集会議の間も誰かが発言する度に、

こつそりとスマートフォンで検索しています。

なぜ神は私をここにお遣わしになったのか、首をひねるばかりです。しかし、知識も経験もない私だからこそ、キリスト教書に馴染みのない読者の観点から発想できるのではないかと、伝えられることもあるのではないかと、とも考えています。

ルカによる福音書一三章には、ぶどう園に植えられた「場違い」ないちじくの木に三年実がつかず、切り倒されそうになるところを、あと一年待つて下さい、「来年は実がなるかもしれない」と園丁が懇願するたとえ話があります。私も実がつかずかどうかわかりませんが、学ぶべきことを学び、この働きをさせていただきたいと思えます。どうぞよろしく願っています。（吉岡）

本のひろば 2017年8月号 予告

本・批評と紹介：宮田光雄著「山上の説教から憲法九条へ」、ラインホルド・ニーバー著「人間の運命」、N・T・ライト著「シンプリ・ジーザス」、丸山久美子著「北森嘉蔵伝」、A・ベルレング他編「旧約新約 聖書神学事典」、川島貞雄著「聖書における食物規定」、G・プラスガー著「カルヴァン神学入門」、樽松かほる他著「戦時下のキリスト教主義学校」、ドイツ福音主義教会常議員会編「義認と自由」ほか

宗教改革500年記念

読者プレゼント キャンペーン開催

宗教改革を取り上げた新刊書籍・雑誌についている応募マークを集めると、点数に応じた金額の図書カードがもれなくもらえます！ 宗教改革の理解を深めながら、めざせ500点！



2017年7月1日より応募受付スタート！ 詳細はホームページをご覧ください

対象の新刊3点 2017年6月刊行！

宗教改革者が見出した光によって、現代の教会と信仰を照らす！

シリーズ わたしたちと宗教改革

監修 出村 彰／大住雄一 〈全5巻〉

各
60
点

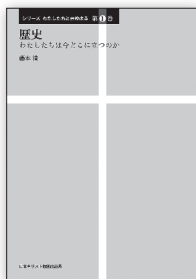
第1巻 歴史

わたしたちは今どこに立つのか

藤本 満

6月30日刊行予定

◆A5判 並製・256頁・2,592円



ヨーロッパからアメリカ、そして現代日本に至るまで、プロテスタント信仰がたどった遙かな旅を描く、画期的な宗教改革史。

第2巻 聖書

神の言葉をどのように聴くのか

大住雄一

6月21日刊行予定

◆A5判 並製・120頁・1,512円



「律法と福音」「聖書と説教」などの切り口を通して、「聖書のみ」というプロテスタント原理が有する豊かな意味を明らかにする。

宗教改革の精神と私たちの信仰とのつながりを説き起こす

宗教改革と現代の信仰

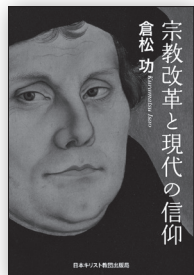
倉松 功

6月5日刊行

ルターの宗教改革の基本から、宗教改革を支えた信仰と神学が、人権思想や教育など現代社会に与えた影響を解き明かす。

◆四六判 並製・112頁・1,620円

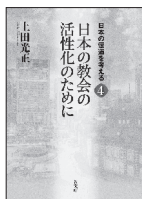
40
点



日本の伝道を考える4

日本の教会の活性化のために

上田光正著



●A5判・328頁・本体2,100円
教会は何によって建てられるのか？

堅実な伝道・牧会をしてきた著者が贈る渾身の「日本伝道論」。二巻にわたり教会論について具体的、実践的に詳述する。本巻では、教会の役割を問い、聖礼典と説教のさらなる充実を目指す。

シリーズ既刊

1 日本人の宗教性とキリスト教

●A5判・210頁・本体1,500円

2 和解の福音

●A5判・202頁・本体1,500円

3 伝道する教会の形成

●A5判・202頁・本体1,900円

6月の新刊 (価格表示は税抜)

かけがえのない
慰め



吉田隆著

カルヴァンの終末論

●A5判・272頁・本体2,900円

牧会者として、聖書学者として、カルヴァンは「終末」をどのように捉えたのか？「上昇的終末論」から「キリストの王国」実現という広大な幻へと展開していった彼の神学的軌跡を、歴史的・文脈的に明らかにする。

『ハイジ』の生まれた世界

ヨハンナ・シュペーリと近代スイス

森田安一著



●四六判・240頁・本体2,300円

『ハイジ』の作者はどんな人物か？一九世紀スイスの社会的・宗教的背景や家庭環境を読み解き、祖父・母・ヨハンナ三代がどのような交友関係から時流に関わり、どう生きたのかを探る。

次の読書のために

シュペーリが影響を受けたドイツ敬虔主義やゲーテを知る。

ドイツ敬虔主義

●B6判・324頁・本体4,000円

M・シュミット著 小林謙一訳

コンパクト評伝シリーズ ゲーテ

T・J・リード著 筑和正格訳 ●小B6判・172頁・本体1,700円



教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL.03-3561-5549 (出版部)
本のご注文は(e-shop 教文館)へ! <http://shop-kyobunkwan.com/>

e-shop 教文館

一九五七年七月一日発行 第三種郵便物認可
二〇一七年七月一日発行 (毎月一回一日発行)
本のひろば 第七一四号 二〇一七年七月号

発行所 千代田区 東京都新宿区新小川町九一ー一 一般財団法人キリスト教文書センター
電話〇三三三二六〇一六五二〇 振替〇〇一七〇一五一二一六七九
発行人 本村利春 編集人 土肥研一 印刷所 株平河工業社
発売所 日本キリスト教書販売株式会社 電話〇三三三二六〇一五六七〇

定価七八円(税抜七円) (千62円)
一年分二二〇〇円(送料共)